

6. 天草の上知と豊後三郡の取得

(1) 関ヶ原の論功行賞

清正は、慶長5年(1600年)6月出立の家康の上杉景勝討伐には、石田三成を襲撃した7人の武将中唯一家康同行を許されず、結局その後の関ヶ原の戦いに参戦できませんでした。それでも、肥後で小西行長の宇土城を、筑後で黒田如水や鍋島直茂らと協力し、立花宗茂の柳川城を開城させています。関ヶ原の開戦前の書状で家康は、九州で西軍を平定したら清正には、肥後1国と筑後を与えると約束していたようですが、翌年年初の論功行賞の発表では、筑後は石田三成を探し出して捕らえた三河岡崎藩主田中吉政に与えられることとなり、清正には、小西領が加増され肥後1国が与えられました。筑後の久留米城を開城させたのは、鍋島・黒田であり、柳川城は鍋島・黒田・清正の3人の協力によってです。従って、清正1人に筑後を与えると、鍋島・黒田に不満が残りますし、清正は実質100万石の太守となり、突出し過ぎます。1601年年初の論功行賞で、関ヶ原で功績があった黒田長政と九州での戦いで功績があった黒田如水が筑前名島52万3千石、関ヶ原で功績があった細川忠興が豊前39万9千石を与えられ、清正には、小西領が加増され肥後1国が与えられたのは、妥当な論功行賞と思われる。しかし、この論功行賞にも家康の信頼度が反映されています。本来なら、豊前中津を領有していた黒田が豊前でしょう。しかし、豊前は毛利の監視・牽制と九州諸大名の監視という役割がありますから、この中で一番家康の信頼が厚い細川を配置したと思われる。黒田には、博多がある筑前名島52万石を与え、花を持たせていますが、如水が九州での戦いで、領地は切り取り次第を求めたことや長政が如水同様調略家であり油断ならないことから、警戒の対象であったと思われる。清正もまた家康の警戒の対象でした。なお、九州に大身大名をずらりと揃えたのは、朝鮮の役が終了して間もなく、国内の混乱に乗り朝鮮と明が報復のため侵攻してくることが考えられ、その場合九州の大名が防戦の中心となることも考えてのことと思われる。清正が難攻不落の巨大な熊本城を築いたのも、その場合に備えるためであり、家康も豊臣系大名の反乱の拠点になることが心配されたとしても、ノーと言える訳がありませんでした。朝鮮の正式な使節が將軍秀忠の元を訪れ和平が成立した1607年までは、豊臣系大名への警戒と共に、明と朝鮮による朝鮮の役の報復侵攻への警戒も怠れないテーマでした。これは家康が島津征伐に踏み出せなかった一因でもあったと思われる。

(2) 豊後3郡の一部と天草の交換

しかし、論功行賞のあった翌年1602年、清正には豊後3郡(大分郡、海部郡、直入郡)の一部2万石余が与えられ、領地は54万石となりました。清正は、関ヶ原の開戦前に家康から、九州の西軍の大名を平定したら「肥後1国と筑後」を与えるという書面を受け取っていましたから、論功行賞発表の前に、筑後は与えられない、肥後1国とする旨の話があり、その際清正は、豊後に港と宿場を置ける領地を強く希望したものと思われる。肥後藩から大坂や京へ向かうには、豊後を通り豊後の港から出航するのが一番便利ですが、今回のよう

に豊後が敵だけの状態だと使えなくなってしまいます。それで清正は、豊後に飛び地として領地を希望し、家康からは、ならば相応の肥後の領地を上知するよう求められたのでしょう。この際に天草を上知することが決まったものと思われます。従って、1601年年初の論功行賞で発表された清正に与えられる肥後52万石には、天草は含まれていなかったと思われます。もし、含まれていて、豊後3郡の一部と天草が等しい石高で交換されたとすれば、増減0であり、清正の領地は52万石から54万石に増えません。

清正が豊後3郡の獲得を考えたのは、慶長5年（1600年）8月頃、清正の正妻かな姫（清浄院）が命からがらに大坂を脱出し、熊本へ帰った出来事があったからと考えられます。慶長5年（1600年）7月、石田三成は、大坂で家康討伐の兵を挙げます。そして、家康軍に参加した大名の大坂在住の妻子を人質として大坂城に收容しようとしています。清正は、この時点では西軍東軍どちらに就くか明らかにしていませんでしたが、正室清浄院も大坂在住で、收容される可能性がありました。このとき、家康軍に参加していた細川忠興の正妻細川ガラシャが收容を拒否し、自害し屋敷に火を放ちます。これで三成軍は、強引な收容を控えますが、対象大名の屋敷は、厳しい監視下に置きます。「続撰清正記」によると、清正は、清浄院を救出すべく水軍奉行梶原助兵衛を大坂に派遣します。助兵衛は、大坂屋敷留守居役大木土佐守と相談し、少し手の込んだ脱出作戦を実行します。まず、助兵衛が流行り病を装い、毎日籠で医者通いを始めます。伝染病だと言って夜具をすっぽり被るなどして籠を膨らませます。監視の侍は、最初は本人や籠の中身など厳しく検（あらた）めますが、暫くすると籠を見ると何の検めもせず通すようになります。その時点を見計らい、籠の中に助兵衛の夜具に包み込むように清浄院を乗せ、監視を突破します。無事木津川の船乗り場に着き、肥後藩の安宅船に乗り込んでも、途中いくつかの船番所があり、監視の者が船に乗り移り臨検するので、これを切り抜ける必要があります。そこで助兵衛は、飲み水をためておく大型の桶を二重底にし、下に空洞部分を設け、そこに清浄院を隠し無事切り抜けます。大坂湾に出ればこの日のために鍛えていた漕ぎ手衆が一気に漕ぎ出し、九州を目指します。

それまで港や道を借りていた豊後では、豊後7党と言われる大名が全員西軍に参加していました。豊後のうち速見郡は、東軍参加の細川忠興に与えられていましたが、三成挙兵とともに三成により改易処分を受け、代わりに元豊後1国の領主大友義統（よしむね）に与えられ、毛利輝元の支援を受けた義統が速見郡で挙兵します。この結果、清浄院の乗った船は、豊後の港には着けられなくなります。そこで、家康軍に参加している黒田長政領の豊前中津に船を着けます。長政と父如水は、三成の挙兵を聞くと素早く妻子を大坂から脱出させ、中津に帰国させていました。中津には如水が在城し、清浄院一行を丁重に扱い、警護の兵を付けて、山国川沿いを耶馬溪、日田を抜け、肥後領まで送り届け、清浄院は9月1日に熊本城に着いたとあります。このルートは、道が険しいばかりでなく、一時通過する日田は、西軍に参加した毛利高政領でしたので、この点でも危険が伴いました。清浄院は、前年家康の養女として清正に嫁いだばかりでしたので、清正としては、何としても無事に助け出す必要がありました。

清正は、論功行賞発表前にあった家康からの肥後 1 国の加増の申し出に対し、大方受け入れながら、清浄院のこの命からがらの大坂脱出劇を語り、今後安全に大坂に出入りするためには、豊後に港と宿場を置くための領地が必要であるとして、3 郡の一部を飛び地として所望したと思われます。関ヶ原の戦いにおいて豊後の大名は全員西軍に就いていましたので、領土の再配分が予想されていました。清正は、このような状況を把握した上で交渉したものであると思われます。清正がここで豊後の一部、特に鶴崎の港を押さえたのは、「秀頼に万が一のことがあった場合に、速やかに大坂に駆けつけるため」という説がありますが、この時点では、清浄院の大坂脱出劇を利用し、瀬戸内海に出る交通の要所を確保しようとしたものであり、そこまで考えたものでないと思われます。

家康としても、関ヶ原の戦いに影響を及ぼしたと言われる細川ガラシャ事件は良く承知しており、自分の養女が第二の細川ガラシャになる危険があった中で、これを回避した清正らの努力を評価し、さらに豊後は配分も可能な状態にあったことから、了承したと思われます。

(3) 寺沢広高への加増問題

この場合、問題になったのは、肥前唐津藩 8 万 3 千石の寺沢広高に対する加増です。寺沢は、九州の大名としては、黒田長政と 2 人だけ関ヶ原に参戦していました。それも 2, 4 0 0 人の兵を率いていました。黒田や細川など関ヶ原参戦者への加増は、旧領の石高の 2 倍以上が普通です。久留米・柳川を三河岡崎藩主田中吉政に与えていますので、残るは関ヶ原に参戦していない肥前の大名を動かして寺沢に与えるか、西軍に参加した大名が多い豊後を与えるかです。肥前では龍造寺藩の執政鍋島直茂の息子勝茂が西軍に就き伏見城攻撃などに参加していましたが、直茂は、東軍が勝利するとみて、自ら食料を調達し東軍に供給するなど東軍に与する姿勢を見せていました。直茂は、関ヶ原で東軍勝利が確定すると速やかに勝茂を西軍から離脱させ、家康に謝罪させます。家康は、直茂の貢献も考え、九州で久留米藩・柳川藩を落とすことを条件に、所領安堵の約束をします。肥前の残りは、有馬藩、平戸藩、大村藩ですが、これらの藩は在国し関ヶ原には参戦しませんでした。東軍への支持を表明していたようです。しかし、この 3 藩は文禄の役で小西を先鋒とする 1 番隊だったこと、同じ肥前の寺沢が関ヶ原に参戦していたこと、鍋島は久留米藩・柳川藩攻めを行うことから、このままでは改易・転封の危険がありました。そこで、東軍に参加した証を作るために、清正の宇土城攻めに参加したと思われます。宇土城は、小西がほとんどの兵を率いて関ヶ原に参戦していましたから、守備の兵は少なく、清正軍だけで十分落とせる状況にありました。清正としては、支援には及ばないと断ることもできたでしょうが、彼らの意図を理解し、また文禄の役の 1 番隊の仲間として宇土城の小西守備隊に投降するよう説得することを期待して、参加を認めたと思われます。この結果、有馬藩・平戸藩・大村藩は所領を安堵されることとなります。

すると、九州で空いている領土として豊後だけとなります。豊後でも西軍に参加した福原長堯の府内は 6 万石、太田一吉の白杵藩は 6 万 3 千石あり、この 2 藩を寺沢に与えれば、

他の関ヶ原参戦大名と同等の加増となります。この案が固まってきたとき、清正が豊後の一部の割譲を求めてきたのではないのでしょうか。その結果家康は、清正に豊後 3 郡の一部を与える代わりに、その石高に相当する肥後の領地を上知するよう求め、清正は、いくつかの理由から天草を上知することとし、獲得する豊後 3 郡の石高は、天草の石高に相当する 2 万石余となったと思われます。

それから家康は、清正に与えた豊後三郡を除く豊後の領地と天草から、寺沢に与える領地を検討したと思われます。寺沢は当時長崎奉行と長崎代官を兼ねていて、天草は長崎から近く、長崎奉行・代官が置かれたのはイエズス会に寄進されていた地域を管理するためであり、天草もキリシタンが多数を占め長崎と似た状態にあったこと、また寺沢は朝鮮で小西派に属し、朝鮮撤退時に清正らが仲間を見捨てて帰国したと家康に訴え出るなど、清正らと不仲であったことから、清正らを重視する家康は、寺沢には天草だけの加増に留めたものと思われます。

(4) 清正が天草を上知した理由

清正が天草を上知した理由は、2つ考えられます。1つ目は、天草は島で構成され、肥後と陸続きでなかったことです。先ずこれが最大の理由です。

2つ目は、キリスト教にまつわる問題からです。天草にキリスト教徒が多いことは、肥後半石の領主就任早々の1588年に起きた天草国人一揆を小西とともに平定したことから、清正は良く知っていました。天草国人一揆の平定は、清正が大名として初めて経験する戦であり、清正の前に肥後国主だった佐々成正は、肥後国人一揆の平定に手間取り、秀吉から切腹を命じられていました。従って清正には、早く平定しないと佐々成正の二の舞になるという恐怖があったと思われます。小西は、天草国人一揆を主導した国人が自分と同じキリスト教徒だったことから、講和によって一揆を収拾しようとしたしましたが、清正は、騙しなども用い早期の武力制圧を目指します。小西・加藤軍には、松浦・有馬・大村などの援軍が入りますが、一揆勢は思いのほか手ごわく、平定するのに1カ月以上を要しています。肥後国人一揆が平定に約半年要していますので、それよりははるかに短いですが、一揆の規模がはるかに小さいものでしたので、1カ月もかかったと言った方が良いかもしれません。では何故一カ月もかかったのでしょうか？それは、小西・清正とも大将として指揮する初の戦で、経験不足だったことが最大の原因ですが、清正は、領主と領民の多くがキリスト教徒だったことが最大の要因と考えたと思います。この戦いで清正には、キリスト教アレルギーができたはずです。この天草国人一揆の前年(1587年)、秀吉は、伴天連追放令を発しています。これは、(a)九州のキリシタン大名は、キリスト教を奨励する一方仏教を弾圧し、大名同志の結びつきが強く、一向一揆のようなキリスト教徒の反乱を恐れたこと (b) 大村領の長崎および茂木がイエズス会に寄進され、イエズス会領が出来上がっていたこと (c) 宣教師やキリシタン大名がかかわって日本人が海外に奴隷として売られた例があったこと、などが原因と言われており、秀吉の傍に仕えていた清正も、キリスト教に対する警戒心を強めていたと思われます。

天草国人一揆後、清正と小西は、1592年から1598年までは朝鮮に出兵し、領国には帰れませんでした。その間小西領となった天草では、小西が天草の支配の為にキリスト教徒の商人や武士を派遣したため、キリスト教徒は益々増加したようです。その結果、1591年から1597年までコレジオ（高等教育）やセミナリオ（初等教育）が置かれ、天正遣欧少年使節で派遣され帰国した4名の日本人少年もここで学んでいたと言います。このように、小西領であった天草は、日本でも有数のキリスト教が盛んな場所になっていたと思われまゝ。清正は、宇土城開城に約3週間も要した表向きの理由を、宇土城籠城者にキリスト教徒が多かったこととし、肥後からキリスト教を追放する意思を固め、天草の上知を決めたものと思われまゝ。1596年のサン・フェリペ号事件や1597年26聖人殉教事件も、この決断に影響を与えているのではないのでしょうか。

尚、清正が宇土城開城に約3週間も要した要因は、宇土城落城は確実であり、落城後領土となる小西領支配の為、小西側に大きな犠牲を出したくなかったことと、清正が東軍に参加したのは、三成と小西憎しが理由で、西軍に参加した豊臣系大名は同僚であり、積極的に討つ気はなかったように思います。そのため、宇土城攻めに時間をかけ、久留米城に兵を派遣せず、柳川城攻めでは立花宗茂に懸命に開城を呼び掛けています。立花宗茂が開城したのは、清正を信じたからであり、清正は、家康に宗茂の助命を嘆願し、助命がなった後は、宗茂を肥後領瀬高に住まわせ、また柳川藩の武士200名余を肥後藩で召し抱えたと言います。

清正は、天草上知が正式に決まった1602年に、キリスト教徒が多かった旧小西領の八代において、キリスト教禁止令を出しますが、天草の上知は、その前に大量のキリスト教徒を肥後から追放した効果を有します。

同じ時期、肥前大村藩でも藩主大村喜前（よしあき）がキリスト教禁止令を出し、自らは清正と同じ日蓮宗に改宗しています。喜前は、清正と親しく、宇土城攻めにも参加し、その結果家康より領土を安堵されています。喜前のキリスト教禁止令、日蓮宗への改宗は、清正と意を通じた動きと思われまゝ。こういった清正の人心収斂力が家康を警戒させることとなります。

（5）豊後3郡と天草の交換が招いた島原の乱

肥前唐津藩領となった天草は、1637年に島原・天草一揆として江戸時代最大の内乱の舞台となりますが、この要因は、キリスト教迫害よりも、肥前唐津藩が4万2千石という実体の倍以上の石高を設定し、過酷な年貢の取り立てを行ったことにあります。清正は、豊後3郡の一部を2万石余で獲得する代わりに天草を上知しており、天草は当時2万石余の石高だったことが分かります。これは、島原・天草一揆後幕府直轄領となり、代官に就任した鈴木重成が検地を行い、幕府へ石高半減を直訴して1659年に認められた石高2万1千石とほぼ一致します。清正が天草を上知していなければ、天草は4万2千石の石高を押し付けられることはなく、その結果天草の住民は、島原の乱には加わっていなかったでしょうし、そもそも島原の乱は起きなかったかもしれません。清正による豊後3郡の一部の獲得と天草の上知は、島原・天草一揆の遠因だったのです。